

—写真訪問①—

函館海洋気象台

気象庁には海洋・海上気象業務を行うため、気象庁海洋気象部（東京）があり、またその外に函館、神戸、長崎、舞鶴の4箇所に海洋気象台があって、当台はその一つである。

気象庁の歴史は明治8年(1875)に創立された東京気象台から始まるが、当台はそれよりも約3年も早く創立された。当台の前身は函館測候所で、そのまた前身は函館気候測量所であり、明治5年8月26日(太陽暦)に、明治政府の政府機関である開拓支庁支庁により創立された。この函館気候測量所では、定時気象観測のみならず、創立当時すでに函館港内の水温観測が行われていた。従って当台は、気象、海洋の両分野での先駆的官署であった。しかし、当台の組織が海洋気象台としての姿に整えられたのはかなり時代を経てからであり、その間の詳細な経緯は当台発行の“函館海洋気象台百年史”(注)に譲りたい。

中央気象台(東京気象台の改称)は社会の発展に伴い、大正9年(1920)にその業務を従来の地上部門に加えて海洋部門と高層気象部門への拡張を図り、まず神戸海洋気象台と高層気象台(現在つくば市)を創設した。そして気象事業の一元化の方針により、北海道庁に所属していた函館測候所は、昭和14年(1939)に国営移管され、中央気象台(昭和31年(1956)に気象庁に昇格)所属となった。この全国的な官制の整備の後に、函館海洋気象台は昭和17年(1942)に、長崎海洋気象台と舞鶴海洋気象台は昭和22年(1947)に創られた。いずれも風光明媚で海運の盛んな港町にあり、海洋気象台は全て港湾を展望できる海辺の場所に建てられていると思われるようだが、当台だけは現在JR函館駅から6KMも離れた市街地の中にある。

ここでは気象などの観測、通報、予警報の発表という地方気象台相当の業務の上に、観測船を持ち、海洋観測と海上気象観測の業務を行う当台の概要を紹介したい。組織は、総務課(11名)・予報課(15)・測候課(20)・海洋課(13)・海上気象課(5)の5課、函館空港出張所(10)・奥尻空港出張所(3)の2空港出張所、及び海洋海上気象観測船の高風丸(23)からなり、総勢100名である。

予報課は府県予報区担当官署として渡島・檜山支庁を担当区域とし、さらに地方海上予報中枢官署として北海道南方海上及び北海道東方海上を担当している。なお、この北海道東方海上は全国的に海難の多い海域で、特に、冬季には流氷や船体着氷の問題を抱えている。

測候課は通常の地上気象・地域気象(アメダス)・地震・津波・生物季節などの地上関係の観測業務の他に、レーダー観測も担当している。観測所は100万ドルの夜景が眼下に広がる函館山の山頂部にあり、職員が2人1組で2泊3日の勤務をしている。しかしながら観測所の高度が310mと低いため胆振・後志地方と岩手県北部がシャドーエリアになるので、横津岳(1167m)への移設工事が始められており、来年の秋頃に完成の予定である。また、寒冷地での農業に適切に気象情報を提供するため、予報課と協力して渡島地方農業気象連絡協議会、檜山地方農業気象官農対策協議会に参加している。

海洋課は主に北海道周辺と三陸沖の海域を担当し、北緯41度30分線と東経144度線を中心に年4回の海洋観測を行い、水温、塩分及び海流の外、栄養塩類の濃度、プランクトン、海面の油分など海洋バックグラウンド

ド汚染の観測を行っており、また、担当海域の地方海面水温予報を発表している。なお、北海道大学の水産学が函館市内にあり、そこの交流も行われている。

海上気象課は海上気象と波浪及び高層気象の観測に加えて、今年度は海霧、やませ、しぐれ、石狩湾小低気圧（大雪）と言ったテーマ別の観測を行っている。旧高風丸に比べて観測船の性能が向上したため、海洋観測と海上気象観測が複合して行われるようになり、両課で年8回の乗船観測となっている。

海洋海上気象観測船の高風丸は昭和63年(1988)7月に竣工した気象庁の最新鋭船である。全長56.0m、全幅9.80m、総トン数は旧高風丸の約倍の487トンあり、耐寒構造となっている。係留気球観測とオメガゾンデ観測が可能で、年間200日の海洋・海上気象観測に従事している。

北海道への空の玄関の一つである函館空港には函館空港出張所が昭和36年(1961)に、また、離島との重要な足である奥尻空港には奥尻空港出張所が昭和50年(1975)に創立された。

ところで、函館気候測量所は初代所長の福士成豊の自宅に置かれ、渡島国函館区船場町9番地(当時)にあった。この場所は函館港の岸壁に沿って建てられた明治の面影を残すレンガ作りの倉庫群の一隅にあり、その跡地に現在は観光者向けの看板が立っている。その後、高砂町、海岸町と移転し、現在の庁舎は、昭和15年(1940)の秋、亀田郡亀田村字赤川通181番地(現在は函館市美原3丁目4-4)に、函館市から約5000坪の土地の提供を受けて新設されて以来のものである。なお、予報分室が昭和27年(1952)から船場町にあったが、昭和51年(1976)に赤川通の本台に合併した。

半世紀を経過した今、増改築の手が加えられたものの庁舎の老朽化は免れず、この度同じ敷地内に3階建一部4階建ての新庁舎が建設されることになり、来年の秋頃に完成の予定である。この構内にはかつて周囲が一面の耕作地であった頃を偲ばせる、松、桜、藤、楓、紫陽花、オンコ(イチイ)などの植え込みがある。これらの中には生物季節の観測に必要な標準木があり、建設工事の支障になるので一時的に構内の片隅に移植された。本庁舎の完成後に、改めて桜などを中心に造園が行われるとのことである。新庁舎は平屋建ての旧庁舎に比べてかなり集約的に建てられるので、遊休地となる南隣の土地は函館財務局に所管換となる。それにしても、将来、いったい誰が住むのであろうか？

注：気象庁、1971：測候時報，38巻12号，406-454；同、1972：測候時報，39巻1号，22-49。別刷り。

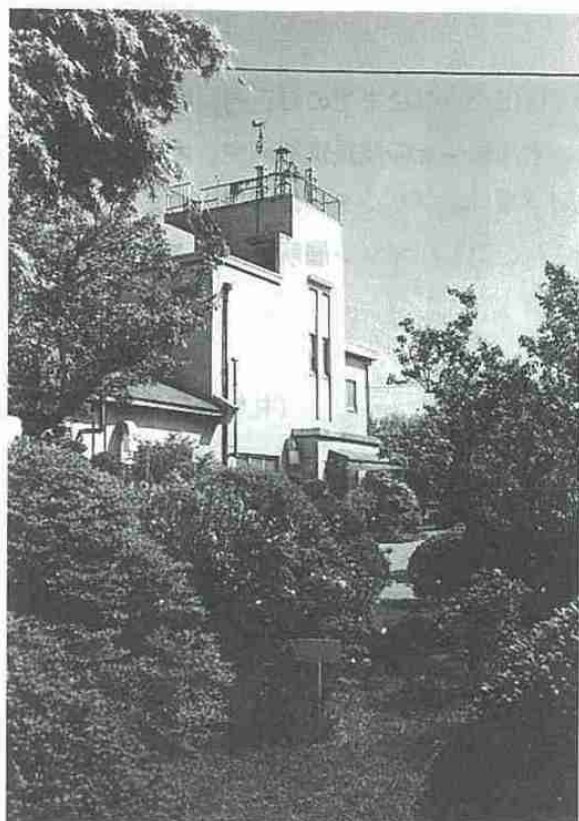
(函館海洋気象台、蔵重 清)



函館海洋気象台 現庁舎



同 測風塔



構内の植え込み